

多摩美卒業公演「ナニカ・ミーツ・ナニカ」～出会えないワタシたちの日々～

劇評

太宰久夫

ミーツとは正しくタイムリーな言葉。私の中で2020年の流行語大賞にノミネートしたい。

間もなく十年となる大震災。あの時のキーワードは“きずな”だった。

“きずな”の原点に“ミーツ”ある。と感じながら観劇した。

演劇はその時代の象徴的な部分や表に見えにくい大事な事にフォーカスを当て、掘り下げ、光をあてるのである。と先人達から学ばされた。

今回のミーツは気を銜う事なく今の社会の様相、つまり数字では見えても実態の見えない何かを表したテーマであると痛感した。

芝居が始まり初めは一体この舞台は私たち観客を何処に連れて行こうとしているのであろうか。と、一抹の不安を感じながらもビジュアル効果(後述する)に引き込まれながら期待も徐々に高まった。

シーンを重ねるうちにストレートであまりに分かりやすい台詞の応酬に、気がつけば舞台上の彼等と同じような呼吸を余儀なくさせられるひと時を不思議に感じた。今私たちが置かれている社会状況に対する内なる想いに共鳴していたに違いない。

それは、2020年に世界中の人々が直面した困難に対しての彼や彼女たちの心の叫びとシンクロする。更にそれは得体の知れぬ新型コロナウイルスの脅威に対する表現だけでなく、大学卒業を目前にした彼等の様々な複雑な想いに対する叫びも各所に散りばめられていた。超特異社会状況下に於ける彼等の素直な気持ちが錯綜する展開となっていた。

時として、聞こえているが何を言っているのか聞き取り難いシャウト台詞、マスク着装によることもあるだろうが、その聞き取りにくい台詞の意味を追いかけるより彼等の素朴で粗削りなエネルギーにいつの間にか感化されていった。

この舞台は演劇舞踊デザイン学科第四期生ならではの舞台に違いないと強く感じた。

インパクトのある舞台美術を巧みに活かし使いこなしたステージングとはお世辞にも言えない。役者の登退場の方向性や上下の高さ感覚、奥行きを活かし方など実に残念な空間演出感覚と感じつつ、見方を変えるとむしろ混沌とさせているようにも見えてくる。それは逆効果的演出を生み出し作品のコンテキストとして目を離せない油断できない舞台空間となり、創作に取り組んだ彼等の深層表現へと誘っていた。

兎に角、オープニングからビジュアルが素晴らしい。

特に衣裳への拘りと描写力に感服した。キャラクターが先かコスチューム・デザインが先なのか？おそらくディバイジング的創作プロセス要素の強い本作品創作において、何処にも不自然さやミスマッチ、醜いビジュアルが存在しない。衣裳プランナーチームが相当拘ったに違いない。かなり手がかかっている。何故斯様に見事にマッチングしているのだろうか。一見、何の意味を持つのかと問いかけるオープニングとエンディングでのシンボリックなコスチュームからビジュアルによるメタファーを醸し出す。

今抱えているコロナ禍に於ける医療現場から、家族、社会、友人、そして自身への向き合う姿勢から、彼らの舞台創造へのリスペクトを感じた。語らず喋らずして、そこに居るだけで何者かを説明的でなく訴えてくるビジュアルの力強さがあった。

「美大で舞台を学ぶ」多摩美のキャッチコピーを目の当たりにした。

新しく、何やら懐かしさを感じさせる今回の舞台は今を正に葛藤しながら生きている彼等の姿そのものでありながら、それは時代を超えた誰もが遭遇するある種普遍的な精神的な通過儀礼なのかもしれない。

ニュースで度々耳にする“新しい生活スタイル”。私はこの言葉に疑問を感じる。そこで“新しい”と敢えてポジティブに表現するフィロソフィが理解し難い。

エンディングの歌詞 “あたらしい”

現実に直面している彼らにとって“あたらしい”とは、何なのだろうか。

改めて考えさせられた。その答えはこの舞台に関係した一人一人の胸の内にあるのだろう。“あたらしい”を口ずさむ姿を通して出演者、スタッフ、関係したプロダクションメンバーの皆が、今を生き抜くために直面する新しい価値観への葛藤を醸し出していた。

With コロナの時代と言われて久しいが、

舞台創作は With 人！人・人・人・・・！

密なくしてありえない現場。コロナに負けてなるものか！なる意気込みを観せてくれた。

今を生きる、生きなくてはならない、彼や彼女たちにしかできない、彼等が今しかできない表現の集大成として創出したミーツである事に大事な価値を感じた舞台だった。